

Keynes「確率」の特殊性に関する考察

東京学芸大学 高敷 学

本研究は主観的論理的確率と分類されるJ.M.Keynesの確率概念についての研究である。確率論の発展と展開は数学の歴史の中でも極めて時代が下ってからのものであるが、Keynesの代表的著書『確率論』も20世紀初頭の確率論百家争鳴の時期に著されたものである。同書は数学としてもまた論理学としても、整然と形式が与えられているとはいえないという印象を強く感じるものではある。しかし、同著の確率を現代的視点から整理解釈することを通じて、不確実性下で意思決定を行なうひとの、特に経済主体の「期待」について彼がいかに特徴的な考え方を持っていたのかについて考察し、明らかにすることが出来ると思う。『確率論』では論理的表現による認識論的確率論を展開している。これは確率を、前件命題 h から後件命題 a への推論過程の、合理的信念の度合い $a/h=\alpha$ と定義したものである。同時にKeynesは確率とは別に「推論の重み」概念を導入した。これは確率的推論の「証拠」の量が多いほどその推論の妥当性を強く認めるという考え方である。一方、Keynes『一般理論』では『確率論』にふれている。Keynesは不確実な概念への注釈として「推論の重み」をあげていること、知識の有無の重要性を論じていることから、『一般理論』で扱われる「真の不確実性」は『確率論』における推論の重みの議論に依拠しているのではないかと、本稿ではこうした観点から、Post-Keynesianが「リスクではない真の不確実性をKeynesは重要視していた」というときの、その内容と実質を『確率論』に求めようとするのである。リスク概念による意思決定論での事象の確率と確率の関係をハッセ図で示すと、あたりまえであるが線形順序束となっている。対して真の不確実性とその意思決定論のベースになる確率関係をハッセ図で示すと、半順序束である。この確率概念の根本的な相違からKeynesの投資期待の形成にいたる意思決定過程は独特なものであると考えられる。

本稿では彼の確率公理の整理、「確率」の順序について、また束論を援用しながらこれらをまとめ、その一方でKeynes『一般理論』における『確率論』の援用箇所を中心に検討を加えた。それらを踏まえ、束論的な見方に基づいた、経済学者Keynesの「不確実性」観と意思決定理論の基礎とを明らかにした。また束の類別を検討し確認するために論理プログラミング言語Prologを用いた。Keynes研究にPrologは有用であると思う。